

シナの皇帝に 土下座する朝鮮王



東洋史家
宮脇 淳子

中

国と韓国は、国内矛盾から国民の目をそらすため、反日共闘ばかり叫んでいるが、朝鮮半島二千年の歴史は、日帝三十六年なんか比較にならないシナ大陸の侵略の歴史だった。

そのうちの一つを今回取り上げる。十七世紀初め、満洲の狩獵民出身のヌルハチは後金国を建て、一六一九年にはサルフの戦いで明軍に圧勝して、遼東から明を追い出した。その息子のホンタイジが即位すると、一六二七年、「明から寝返ってこちら側につけ」と後金軍が朝鮮に侵攻した。これを朝鮮では「丁卯胡乱」と言う。朝鮮人は北の狩獵民を見下して「胡」と呼んでいたのである。

しかし、明にさえ大勝した後金軍にはさからえず、明の年号を使わないこと、王族を人質に差し出すことで和議を結び、これ以後、後金を兄、朝鮮を弟と見なすことになった。

ところが、朝鮮の儒者たちは納得し

なかった。漢字も読めない女真人（満洲人）なんか、それまで人間扱いもせず見下してきたのに、はいそうですか、とは言えない。国内は割れた。

そして一六三六年、いよいよホンタイジが皇帝となり、大清という国号を定めた時、朝鮮に「こちらはもう本当の皇帝になったんだから、明を捨てて臣属しろ、朝貢して来い」と言ったら、朝鮮は知らん顔したのである。激怒したホンタイジは、直ちに朝鮮へ攻め込む。これが「丙子胡乱」である。

清の圧倒的な兵力の前に各地で敗北を重ねた朝鮮軍は、四十日で降伏した。清軍があまりにも早く今のソウルに至ったので、王宮にいた朝鮮王の仁祖は地方に逃げるひまもなく、ソウルの郊外の南漢山城という小高い丘に逃げ込んで、包囲されてしまった。

李氏朝鮮は、この時に清朝に完全に降り、仁祖は「三田渡」という場所で清

の太宗皇帝に跪き、三跪九叩頭をさせられた。これは、臣下が皇帝に対して最上級の尊敬を表すお辞儀で、三回跪き、その都度三回ずつ頭を地面にこすり付けるというものである。

清はこれを記念して、一六三九年に「大清皇帝功德碑」という石碑を、今のソウルに建てさせた。通称は場所の名前を取って「三田渡碑」という。

文面はどういうものかというところ、「愚かな朝鮮王は偉大な清国皇帝に逆らった。清国皇帝は愚かな朝鮮王をたしなめ、己の滞在を許してやった。良心に目覚めた朝鮮王は自分の愚かさを猛省し、偉大な清国皇帝の臣下になることを誓った。我が朝鮮はこの清国皇帝の功德を永遠に忘れず、また、清国に逆らった愚かな罪の反省をするためにこの石碑を立てることとする」という内容で、嫌がらせそのものである。

巨大な石に、清朝の公用語である満

洲語、モンゴル語、漢語の三カ国語でこういう文面を刻ませたのである。

その後、石碑がたどった運命は興味深い。日清戦争で日本が勝利し、一八九五年の下関条約で、清の冊封体制より李氏朝鮮が離脱したあと、「屈辱碑」とされていた同碑は、迎恩門と同時期に倒され、地中に埋められた。「もう清朝なんか必要ない」というわけだ。

しかし、日韓併合後の一九一三年には地中から引き上げられた。日本は歴史的遺物を大切に扱うからである。ところが、一九四五年の光復（主権回復）後に「恥さらしだ」という理由で、李承晩の指示によって再び埋められた。その後、何度か出入を繰り返した後、一九五七年になって、大韓民国指定史跡第一〇一号に指定された。

一九六三年になって、石碑は洪水で流されてしまった。復元された石碑は、二〇〇八年、原位置の考証を行ない、

ロッテワールドのビルの裏手の緑地帯へ移設された。

実は二〇〇四年に、私は主人と一緒にこれを見に行ったことがある。当時は住宅街の中のふつうの小さな公園にぽつんと立っていて、タクシーの運転手も場所を知らなかった。

石碑の横に建てられていた、仁祖がホンタイジの前で土下座している銅板は、一九八三年に作られたもので文化財的な価値はないとの理由により、文化財委員会の判断に基づき撤去されたそうである。

朴槿恵が習近平に跪いているレリーフがどこかに建てられ、何十年も後には、屈辱の象徴と言われて地中に埋められないと誰が言えよう。

みやわき じゅんこ

一九五二年、和歌山県生まれ。京都大学文学部卒業、大阪大学大学院博士課程修了。学術博士。著書に『真実の満洲史』『真実の中国史』『真実の朝鮮史』（以上、ピジネス社）、『魏流時代劇と朝鮮史の真実』（扶桑社）、『世界史のなかの満洲帝国と日本（ワック）等』。